

住環境の文化史から〈近代の人づくり〉を読み解く

一橋大学 太田美幸

1. はじめに——住環境と人間形成

人間は社会環境や自然環境など、外部のあらゆる環境との相互作用を通じて発達するが、こうした環境からの影響を統御し、人間形成を望ましい方向に導く営みが「教育」とされるとされる。ジョン・デューイは『民主主義と教育』において、「環境からの無意識的な影響」はきわめて精妙で浸透力が強いことを指摘し、そうした影響を意識的に統制する唯一の方法は「未成熟者がその中で行動し、それゆえ、そこで考えたり、感じたりするところの、環境を統御すること」であるとして、「われわれは決して直接に教育するのではないのであって、環境によって間接的に教育するのである」と述べている（デューイ1916=1975:37-39）。

デューイは「その成員の知的および道徳的性向に影響を与えることを特に考慮して構成された環境の典型的な例」として学校を挙げているが（デューイ1916=1975:39）、近代以降きわめて私的な空間となった「住まい」もまた、「環境による間接的な教育」の場となってきた。住まいの変化を考察したイーブ・トゥアンは、18世紀以降、家族による子どもの保護責任が認識されはじめたことによって「責任ある人々は、子どものために新しい種類の道徳と物理的な環境が作られなければならない」と信じ（トゥアン1982=1993:118）るようになり、こうした意識の変化を反映して、19世紀以降、住まいのなかに「子ども部屋」が設けられるようになったと指摘している。さらに神野由紀によれば、19世紀末には子ども向けにデザインされた商品が現れ、子どものために特別に設えられた環境が子どもの発育に重大な影響を及ぼすという信仰が、近代的家族観、子ども観をもつ中流上層階級に受け容れられていったという（神野2011:141-142）。こうした「信仰」はやがて広い範囲で定着し、発達をめぐる「文化」の一部となっ

てきた。

物的環境としての住まいで営まれる生活にはその家族の文化がさまざまな形で反映されており、それは文化資本の一部として家族のなかで継承される。すなわち、「住む」ことを通じて文化化の過程が進行するのであり、この意味で、住環境がもつ人間形成作用は、日常生活のなかに埋め込まれた非定型的な教育（インフォーマル・エデュケーション）であるといえる¹⁾。近代教育学はフォーマルな教育としての近代学校を主たる検討対象としてきたが、そこではこうしたインフォーマルな人づくりの営みのなかで伝達されてきた価値や文化、人間形成をめぐる人々の思いや葛藤の多くは見落とされがちである。このような状況に対して、「学校教育につきない人間形成の諸要因を視野におさめる」ことを目指して提唱されたのが、「発達文化」という概念装置である（関1998）。

関啓子によれば、発達文化とは「ある集団に特徴的なひとりだちのイメージとひとりだちのさせ方」「ひとりだちをめぐる感じ方、考え方、行動の仕方」（関1998:283）を指す。そしてそれは、「学校とそれを制度化する国家だけではなく、民族や言語や宗教を軸としながらも、それが交錯する地域社会において、歴史、伝統、イデオロギー、風景、道具などさまざまな要素が複雑に絡み合っており、つくりあげられる」（青木・柿内・関編2015:vi）ものである。関は「学習者に意識化されない伝達」として景観の人間形成作用を重視し、「育ちの場の考察が発達文化の解説に欠かせない」と述べたうえで、その具体例として宗教的シンボルである建造物に言及しているが（関1998:304）、家族が所属する諸社会集団（階級・階層、エスニシティ、宗教、地域等）の多様な文化を反映して構成される「育ちの場」としての住環境も、さまざまな要素が織り込まれた発達文化の一つの様態として重要な分析対象であるといっていよう。

子どもたちが他者や事物とかかわりながら自己を形成する場として物的環境に関心を寄せる研究においては、教育空間の構成は発達を方向づける潜在的カリキュラムとみなされ、その重要性についての認識が促されてきたが、そうした研究の多くは学校の校舎や教室空間のありかたを検討の対象とするものであり、日常生活のための住空間やそれを構成する物質文化の人間形成作用を考察する研究は少ない。そのなかで、人間形成についての空間論的な研究をおこなってきたオットー・フリードリッヒ・ボルノウは、「人間が世界のなかで自己を保持し、そこで自己の課題を果すことができるためには、人間は、外部世界との戦いに疲れはてたときに、いつでもそこに退き、そこで緊張をとき、ふたたび自己自身へもどることのできる、やすらぎと平安の空間を必要とする」と述べ、こうした「人間の自己生成の過程」にとって、公共から分離された私的な空間が重要であると主張している（ボルノウ1963=1988:130）。また、住居の中にあるすべての物品はその人の生活の「歴史」を表現するものであり、「そこに居住している人間の表現」としての住居が形成されることによって、人間は生の安定性を感じることができるとも述べている（ボルノウ1963=1988:144-145）。

ボルノウのいう人間の生を支えるやすらぎや安定感、住環境の構成に反映された文化の産物であるとともに、住環境を構成することそのものが人間形成のための文化的実践であるといえる。先に述べたように、どのような空間に住むかということは個人の文化化過程と密接に関わっているわけだが、私的空間である住居には、公的空間の構成には必ずしも反映されない多様な要素が織り込まれており、そこでは公的な教育空間とは異なる文化化が進行しているはずである。ボルノウがいうように、人間の生を支える重要な機能を住まいが有しているとすれば、住環境にいかなる文化が反映されているのかを明らかにするとともに、住環境をつくりかえるという行為を〈近代の人づくり〉の一つの方法として措定することが、人間形成をめぐる人々の思いや葛藤を読み解くための一つの糸口になるのではないだろうか。

社会変動のなかでそれまでのひとりだちのイメージと算段が崩壊し、新たなひとりだちのさせ方

を模索せざるをえない転換期には、普段は意識されない発達文化ありようが浮かび上がる（関1998:285）。産業化の進展によって日常物質文化が著しく変容した19世紀後半から20世紀前半は、まさしくそのような時期であった。都市部を中心にインフラが整備され、機能性や合理性を重視するモダニズム建築が国を超えた運動として展開されるとともに、特に労働者層に向けて近代的な新しい住居や日用品が提案され、各地で生活改善の運動が繰り広げられたこの時期、住環境の構成は大きく変化した。この時期に生じた住環境刷新の試みとそれを支えた思想から、新たなひとりだちの模索の一端を読み解くことができると思われる。

こうした課題に迫るためには、人間形成への影響を考慮しながら住環境が構想された事例を具体的に検討することが求められるのは言うまでもないが、さしあたり本稿では、19-20世紀転換期における近代批判のなかで生まれたモダニズムの思想と運動の一部を参照することで、そうした作業に取り組む際にいかなる視角がありうるかを考察したい。

2. 生活の美化による意識の向上——モリスの思想と運動

空間を再編成することによって人間形成を統御しようとする試みは、近代以降さまざまに存在してきたが²⁾、住環境に直接かかわるものとしては、建築や日用品のデザインを通して人々の生活環境を変革しようとした近代デザイン運動に注目するのが妥当であろう。19世紀後半のイギリスで展開した「アーツ・アンド・クラフツ運動」がその嚆矢であり³⁾、この運動を先導したのは、デザイナー、詩人、さらには社会主義運動の活動家でもあったウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）であった。後述するように、19世紀末から20世紀前半にかけて世界各地に生じた住環境の刷新をめぐる諸運動は、多かれ少なかれモリスの思想と運動から影響を受けている。したがって、まずは彼の活動とそれを支えた思想を概観しておきたい。

モリスは若い頃から中世への憧憬を抱き、聖職者を志してオックスフォード大学で学んだが、や

がて建築や芸術に強い関心を寄せるようになった。1861年に仲間たちと「モリス・マーシャル・フォークナー商会」(のちにモリスの単独経営となり「モリス商会」と改称)を設立し、そこを拠点として、中世風的美を追求したステンドグラスやテキスタイル、宮殿や博物館の内装などを手がけるとともに、田園地方の土着的な建築や職人の手による工芸の復興を試み、民衆的な使いやすい家具なども販売して、人々の日常生活を美しく豊かなものにすることを目指した。その一方で、社会主義運動の活動家としても精力的に働いた。モリスをこうした活動に駆り立てた要因はいくつかあるが、思想的には、美的感覚に働きかけることによって道徳心や倫理観を育成することがよりよい社会の形成につながると主張したジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)の影響を強く受けていたとされる。産業革命後のイギリス社会では、非熟練労働者による過酷な工場労働によって安価な商品が大量生産されるようになり、多くの人々は不安定な労働で手に入れたわずかな収入で質の劣る商品を購入するしかない状況にあった。そのなかで、ラスキンは労働から喜びが奪われてしまったことを批判し、「労働における人間の喜びの表現としての芸術」を主張した。モリスはこうした思想を継承し、「デザインを通じた生活環境の変革、あるいは万人のための美的環境形成」(藤田1996、2009)を目指したのである⁴⁾。

このような考え方は、1879年の講演「民衆の芸術(The Art of the People)」および1880年の「生活の美(The Beauty of Life)」に特に明確に示されている。「民衆の芸術」においてモリスは、「われわれの多くは建築をこよなく愛し、美しいもののなかに住むことは身心の健康に役立つと信じているけれども、大都会のわれわれのほとんどが、今では醜さと不便との軽蔑をこめた通り言葉となってしまった家屋に住むことをよぎなくされている」(モリス1879=1973:49-50)と述べたうえで、少数の特権者によって培われた排他的な「芸術」を批判し、「われわれが努力して求めている芸術は、すべての人があずかることができ、すべての人を向上させうる結構なものである」(モリス1879=1973:51)と主張する。そして歴史を振り返りつつ、「われわれの建築的宝の大半を形成し

ている」のは「人びとが毎日住んでいた家や、かれらが礼拝した、顧みられない教会」であり、それらを設計し装飾したのは偉大な建築家などではなく、村大工、鍛冶屋、石屋といった「農民の兄弟」、すなわち「普通の人」であったと指摘して、かれらの手による素朴で繊細な作品は、喜びをとまなう労働によって生み出されたものであると断言している(モリス1879=1973:53)。彼によれば、「真の芸術」とは「労働の喜びの、人間による表現」(モリス1879=1973:54)であり、そのような芸術が「人々を向上させる」のである。

さらに「生活の美」では、住居の中から「厄介なぜいたく品」を取り払うことを提唱し、「役に立たないもの、美しいと思わないものを、家に置いてはならない」(Morris 1880/2012:76)という黄金律を示した。彼の考えでは、「文明化[知的文化的洗練]とは、平和、秩序、自由、人々の親交が実現されること、真実を愛し、不正義を憎むようになること」(Morris 1880/2012:75-76)を意味し、それは「快適な生活を手に入れること」で果たされる。無名の職人による手仕事から生み出される室内装飾、家具や日用品こそが「真の芸術」「美しいもの」であり、そうした作品で構成された質素ではあるが快適な住居で日々を暮らすことによって、人々の意識が向上し、平和で公正な社会が実現されるのである。ここでいう「人々の意識の向上」とは、民衆の美的感覚が涵養され、美しいもの(正義)を愛し、美しくないもの(不公正)を憎む感性が育まれることを指している。「平和で公正な社会」の実現を目指す思想において、美とは豪華さではなく素朴さのなかに見出されるものとされる。そうした美的感覚の育成が人間形成の目標として措定され、「真の芸術」によって構成された住居に暮らすことがそれを実現するための方法であるとされた。こうした思想を基盤として展開されたアーツ・アンド・クラフツ運動は、「人々の生活を美しく豊かなものにするという、それまではほとんど試みられなかった事業」(藤田2008:12)であった⁵⁾。

ラスキンやモリスの思想とアーツ・アンド・クラフツ運動は、ヨーロッパ大陸で「アール・ヌーヴォー」や「ユーゲント・シュティール」といった新しい動きを開花させ、日本を含むアジア諸国

にも伝播したが、その影響はデザインの世界にとどまらず、セツルメント運動や環境保護運動⁶⁾といった領域にも及んだ。その一例として、1888年に創設された「ギルド・オブ・ハンディクラフト」があげられる。このギルドを立ち上げたチャールズ・ロバート・アシュビー (Charles Robert Ashbee, 1863-1942) は、大学在学中に大学拡張運動に触れ、卒業後はロンドンのスラム地区イースト・エンドに開設されたセツルメントハウス「トインビー・ホール」に住み込んで地域福祉活動に従事した人物である。彼はスラムに暮らす労働者たちと一緒に始めた勉強会でラスキンの著書を読み、手仕事の重要性を実感するようになったという。やがて、トインビー・ホールに新築された食堂の室内装飾を労働者たちとともに手がけることとなり、この経験を契機として、貧困地区での装飾芸術教育を基盤とするギルド・オブ・ハンディクラフトを創設し、工芸を通じて労働者たちの自活を目指したのであった(横山2009:75-76)。

3. 空間構成と労働者の啓蒙——田園都市という手法

セツルメント運動は、ラスキンから思想的な影響を受けた学生たちが開始したものであったが、なかでもトインビー・ホールの創設にかかわったヘンリエッタ・バーネット (Henrietta Barnett, 1851-1936) は、トインビー・ホールの理念を具体的に実現するために、ロンドンの北西部で「ハムステッド田園郊外」の建設に取り組んだことで知られている。ハムステッド・ヒースの自然環境保護運動にかかわっていた彼女は、開発業者による自然破壊と周辺での無秩序な宅地開発に反対し、自らの手でこの地に理想的な住環境をつくりあげようとした。1906年に非営利財団を立ち上げて投資を募り、広大な土地を手に入れ、アーツ・アンド・クラフツ運動に共鳴していた建築家レイモンド・アンウィン (Raymond Unwin, 1863-1940) らの協力を得て、階級混合のコミュニティの形成を目指した。そのなかで、労働者のための快適な空間の設計も試みられた(黒石2009、大島2010)。

設計を担当したアンウィンは「中世の村」の再現を試み、のちに芸術作品として高く評価される

美しい街並みをつくりだしたが、ここで重視されたのは、労働者階級の住空間に自然環境を残したオープンスペースを取り入れ、そこを共有で使用できる余暇の場とすることであったという。労働者に余暇の場が提供されるということは、余暇をもつことを許されるということの意味する(大島2010:51)。街並みに自然豊かな余暇の場を取り入れることが、労働者の生活状況の改善と啓蒙に資するものと期待されていたのであった⁷⁾。

ハムステッドの試みに先だって開始されていた田園都市運動も、同様の志向を有していた。田園都市運動は、エベネザー・ハワード (Ebenezer Howard, 1850-1928) が1898年の著書『明日—真の改革に至る平和な道』(1902年に『明日の田園都市』として改訂)で提起したアイデアを発端とする。産業革命以後、大都市では人口過密による住環境の悪化が進み、農村は人口の流出による疲弊が顕著であった。ハワードは、「精力的で活動的な都市生活のあらゆる利点と、農村のすべての美しさと楽しさが完全に融合した」(ハワード1902=1968:79) 田園都市を大都市近郊に建設することを提唱し、彼の構想⁸⁾にもとづいて1899年に田園都市協会が設立され、1903年にはロンドン近郊のレッチワースにおいて最初の田園都市の建設が始まった。その設計を任されたのがアンウィンである。彼はアーツ・アンド・クラフツ運動の思想をここでの住空間の設計に活かそうとし、その後、先述のハムステッドでも同様のことを試みたのであった。他方、田園都市運動の思想は、労働者を健康で人間性豊かにするためには環境を変える必要があるとするロバート・オーエン (Robert Owen, 1771-1858) の性格形成論の流れを汲んでいるともされる(西山2002:57-64)。換言すれば、アーツ・アンド・クラフツ運動の思想は、労働者の物的生活環境を整えることで勤勉で規律正しい生活態度が形成されるというオーエンの考えと親和的であったといえる⁹⁾。

田園都市運動はやがてヨーロッパ各地に伝わったが、なかでもその有効性にいち早く注目したのはドイツであった。ドイツの田園都市運動について考察した山名淳は、「田園都市計画は、大都市問題に象徴される世紀転換期の社会問題を解消するための啓蒙を内包した総合的な生活改革プロジ

エクトであったが、(中略)そうした啓蒙活動にとって最も重要と見なされたのは、人間がその身を置く空間構成であった」(山名2006:12)と述べ、「空間が人間形成に寄与するという田園都市の発想は、その根本において広義の教育的意義を内包している」というハルトマンの指摘を引用し、田園都市と教育との本質的な関連性に注意を促している(山名2006:13、Hartman 1976)¹⁰⁾。山名が検討の対象としたヘレラウは、美しくかつ安価な家具や日用品を製造する「ドイツ工芸工房」が中心となって建設した、ドイツを代表する田園都市である¹¹⁾。ドイツ工芸工房の創業者カール・シュミット(Karl Schmidt, 1873-1948)は、工房で働く職人に手厚い芸術教育をおこなうことによって、美しい家具や日用品の生産を促進することを目指すとともに、人々の生活が美しい家具や日用品で覆われることによって、「美に対する感覚」が養成できると考えていたという(山名2006:151)。

シュミットは、ドイツ国内で活動していた他の工房とともに「芸術家、建築家、経営者、専門家の連合」として1907年に設立された「ドイツ工作連盟」にも参加していた。ドイツ工作連盟は、アーツ・アンド・クラフツ運動に影響を受けて開始されたものではあったが、職人による手仕事を重視したアーツ・アンド・クラフツ運動とは異なり、工業化と規格化によって質のよい製品を大量に普及させることを目指し、近代産業デザインの先駆けとなった団体である。職人が手仕事によって制作した製品は高価にならざるを得ず、経済的に余裕のある人にしか購入できないという限界があったが、ドイツ工作連盟は芸術と工業を結びつけ、芸術性の高い製品を大量生産することによって庶民の生活環境を改善しようとしたのであった¹²⁾。

4. 生活の近代化による国民形成

アーツ・アンド・クラフツ運動やドイツ工作連盟の思想と活動は、北欧にも大きな影響を与えた。近代デザイン史研究においては、アーツ・アンド・クラフツ運動の価値観を受け継ぎ、モダニズムの精神を現実のものとすることができた唯一の国は、イギリスでもドイツでもなくスウェーデンであったと目されている(ネイラー 1990=1997:

176、182)。

スウェーデンにラスキンやモリスの思想を紹介し、「社会美運動」と称された取り組みを思想的に先導したのは、社会批評家のエレン・ケイ(Ellen Key, 1849-1926)である。ケイは、「美」とは伝統的な民衆の生活、すなわち農村で継承されてきた昔ながらの生活の中に見出されるものであるとし、自然の中で美しい草花や鳥の声を楽しむこと、住まいを整えることによって「美的感覚」を育成することの重要性と、それが社会形成に及ぼす多大な影響について論じるとともに(Key 1899、1900、1906)、民衆教育運動を通じて生活環境の美化に取り組んだ。彼女の思想から強く影響を受け、ドイツ工作連盟の活動にも学んだ美術史家グレゴール・パウルソン(Gregor Paulsson, 1889-1977)は、1919年に出版された著書『より美しい日用品』において「誰もが使う日用品こそ美しいものでなければならない」と主張し(Paulsson 1919)、モダニストの建築家や製造業者、消費生活協同組合などと協力しながら労働者向け商品の改良と大量生産に取り組み、国民の「趣味」を涵養する活動に力を入れた。パウルソンらの活動によってスウェーデンの近代産業デザインは大きく発展し、国際的にも高い評価を得るようになる。

同時期に政権に就いた社会民主党も、「近代的で調和のとれた住環境は近代的な人間を育てる」という考え方のもとでパウルソンらの活動を支援し、彼らが提案する間取りやインテリアの実例をモデルとして取り入れながら、住宅政策を積極的に推進した¹³⁾。「平等で、互いに気遣い、協力し助け合う家庭のような国家」を目指し、「国民の家」というスローガンを掲げて福祉国家形成を進めていた社民党は、民間組織と協力体制を築きながら「社会美」の運動に取り組み、「美しい社会」に暮らす民主的な国民を形成しようとしたのであった。

物的な生活環境を「美しく」整えることで「美的感覚」が育成され、それが「勤勉で規律正しい態度」を生み、平和で公正な社会の実現につながるという考え方は、各地でそれぞれの社会事情に即して受容され実践された。住環境を通じた人間形成への働きかけを視野に入れたセツルメント運動や田園都市運動はその一例であるが、いずれも対象は限定的であった。そのなかで、福祉国家形

成期のスウェーデンにおいて、それが国民形成という課題に直結していたということは注目に値する。実のところ、こうした性格は同時期に日本で展開していた生活改善運動にも見られるものである。

生活改善運動とは、明治末期から大正期にかけての日本において、生活の近代化を目指して展開された社会教育事業である。アーツ・アンド・クラフツ運動やセツルメント運動、田園都市の思想は、19世紀末から20世紀初頭にはすでに日本でも紹介され¹⁴⁾、田園都市の手法は当初は都市部での住宅地開発に応用されたが、やがて政府の指導のもとで全国的に展開されるようになった生活改善運動のもとで、住宅政策にも少なからぬ影響を与えた（黒石2009:186-188）。生活改善運動は、1919年に文部省が東京教育博物館において「生活改善展覧会」を開催したことを契機に、翌1920年に文部省の外郭団体として「生活改善同盟会」が結成されたことで本格的な展開を見せるようになる。

当時、「住宅改良会」「文化生活研究会」といった民間団体を含む複数の団体が生活の改善を目指す啓蒙活動を展開していたが、そのなかで、この運動が文部省の社会教育事業にも組み込まれていたということは、人々の生活の「改善」が国民形成における重要な課題であったことを示している。祐成保志は、日露戦争後に新たな政策の方向が模索されるなかで1907年に内務省地方局有志によって執筆された『田園都市』に、「剛健なる精神は健全なる家庭に宿り、健全なる家庭はつねに整頓せる住居のなかに形成せらる。されば良民をつくるのみちは、まず家庭を改良するにあり、家庭の改良はまた実に住居を斉うるをもって第一義とす」（祐成2008:76、内務省地方局有志1907/1980:99）という記述があったことに注目し、「改良」を進めるために「学校教育以外の場での啓蒙」が必要であると認識されていたことに注意を促している¹⁵⁾。

生活改善同盟会は、衣食住について目指すべき具体的方針を定め、全国各地で開催された講習会や展覧会などを通じて国民の啓蒙に取り組んだ。とりわけ住居に関しては、同盟会の内部に設置された住宅改善調査委員会が精力的に活動を進め、1922年に上野公園を会場として開催された「平和

記念東京博覧会」では、「文化村」と名付けられた実物住宅展示場に椅子式による居間中心型の「文化住宅」を出品するなどした。実物展示という手法は、観衆に「理想の住まい」のありかたを啓蒙的に教え込むのに適したものであった。

新中間層を主な対象として展開された都市部の生活改善運動においては、「改善」とは相当程度に「欧化」を意味し、「文化住宅」をはじめとする西洋風の生活様式が推奨されていた。だがその一方で、1930年代に東北地方で展開された農村生活改善事業は、生活改善同盟会の委員でもあった今和次郎（1888-1973）らがおこなった農村の生活実態に関する綿密な調査の結果をふまえ、機能的で合理的な住空間の配置が提案されながらも既存の生活様式を尊重するものであった。祐成は、今の初期の著作『日本の民家』においてラスキンが引用され、民家研究の課題として「趣味の建設（formation of taste）」（今1922/1989:34）が挙げられていることに注意を促している。祐成によれば、今の活動を支えていたのは、農村に暮らす人々が地域の特性に合わせてモノの配置や利用法を工夫し、「生活を構成する造形力」を発揮してきたことへの関心であり、やがて今は農村生活改善事業を通じて「身体的感受性の形成による造形力の獲得」という課題を意識するに至ったという（祐成2008:107-110）。

黒石いずみは、この事業においては「短い期間ではあったが、アーツ・アンド・クラフツ運動やセツルメント運動などで追求された住み手の生活の質そのものを重視する思想が明らかに参考にされ実現された」（黒石2009:188）と指摘している。これは必ずしも運動全体を貫くものとはならなかったが、本稿の関心にとっては、今が身体的感受性および「趣味」の形成によって環境に働きかける造形力が育まれるとの考えをもって生活改善に取り組んでいたことは看過できない¹⁶⁾。

5. 空間への意味付与

ここまで概観してきたいくつかの事例は、世紀転換期の近代批判にもとづくモダニズムの一部として、失われつつある昔ながらの生活文化に対するノスタルジーを含みつつ、近代と折り合いをつ

けて新しい生活様式を模索する試みであったといえる。そこでは、物的な生活環境を「美しく」整えることで「美的感覚」が育成され、それが「勤勉で規律正しい態度」を生み、平和で公正な社会の実現につながるというモリスの思想が多かれ少なかれ継承されていた。社会主義者であったモリスがデザインの仕事に「公正な社会の実現」という目的を結節し、さらに芸術を通じた人間形成について論じるにいたった背景には、彼自身の複雑な思想体系があったわけだが、アーツ・アンド・クラフツ運動から影響を受けた諸運動にそうした思想体系が貫かれていたわけではない。モリスの思想や運動が参照されるなかで、「美しく整った環境」が「よりよい人間」をつくり「よりよい社会」を生むという単純化された論理が、それぞれの社会の事情に即して広範に受容されたと考えるのが適切であろう¹⁷⁾。どのような状態を「美しく整った環境」とみなすのかはそれぞれの社会で異なっているが、この論理においては、ある文脈で「美しい」とされたものには、人間形成に資するものとしての価値が付与されることになる。そして、そのように意味づけられたものが住環境に取り入れられることによって、それを「美しい」とみなす感性が再生産されるわけだが、ここで問題となるのは、そのような意味づけが誰によってどのようになされるのかということである。

アメリカの家庭生活に大きな影響を与えてきた「家事アドバイザー」の歴史を検討したサラ・A・レヴィットは、「家具やカーテン、浴室備品そのものに、倫理的な特質や特徴があるわけではない。ところが、家庭生活をどうするかというアドバイスやマニュアルが、これらの物質に文化的な意味と特徴とを与えるのである」と述べたうえで、「それにどんな意味を持たせるかについて、一体誰が決めているのかが問題なのである」（レヴィット 2002=2014:17-18）と指摘している。19世紀後半のアメリカに登場した家事アドバイザーたちは、本や雑誌、モデル住宅などを通じて、家庭で家事を担う女性たちに「文化的理想」を示し続けてきた。その影響力は現在も衰えていない。レヴィットはこうした資料を通じて、何が望ましいとされてきたのか、それが歴史的にどのように変遷してきたのかを明らかにし、その背景にあった思想や政治

的事情をも窺っている。

影響力のある媒体によって「望ましい」とされたものは、誰がどのような理由でそれを「望ましい」としたのかは見えないまま、支配的文化として日常生活の空間に徐々に浸透していく。レヴィットの分析によれば、アメリカの家事アドバイザーたちは、家庭を維持するという伝統的役割を適切に果たすよう女性たちを説得するために科学的な説明を用いたり、手仕事の重要さを伝えるためにアーツ・アンド・クラフツの理念を紹介したり、急増した移民の家庭をアメリカ化するために家事マニュアルをつくったり、女性が政治的な場で声をあげるのを助けるために家庭のルールや規則を提案したりしてきたという。「美しい日用品」の大量生産を主導したイデオログや、西洋風の生活様式を推奨した政府の意図についても、同様の観点から読み解く必要があるだろう。すなわち、人々を「近代的」な人間にするために、住環境を構成する諸要素に特定の意味が付与されてきたのである。

ただし、家事アドバイザーが書き残してきたのは「文化的理想」であって、「文化的現実」ではない（レヴィット 2002=2014:18）。つまり、家事アドバイザーの示した理想がそのまま家庭で実践されてきたわけではない。多くの場合、家庭においてはエスニシティ、宗教、地域性等々に根ざした空間構成が試みられるものであり、例えば、設計者やデザイナーの意図に反するような空間やモノの使い方、室内の装飾の仕方や生活用品の選び方などに、家族が受け継いできた文化の一端が表現されている。それらは家族のルーツを確認しアイデンティティを維持するための文化的な実践であり、強い影響力をもって外部から入り込む支配的文化と混ざりあいながら、住環境を構成する諸要素に人間形成上の意味を付与し、そこに暮らす人々の感性を方向づける。

近代家族史の観点から日本の住宅史を研究してきた西川祐子は、近代日本における民衆の住まいの変遷はモデル先行であり、中産階級モデルに追いつこうとする「国民的な規模の社会教育」であったと指摘している。そのうえで、モデルが発揮する「魅力的強制力」は社会教育に関連するものであるとして、「住まいは私領域ですが、私領域

こそ政治経済、そして思想闘争の場なのだと思います」と述べている(西川・祐成・篠原他2004:5)。こうした西川の見解を受けて、住宅をめぐる社会史を研究する祐成は、「空間を飼い慣らして、自分の生きる場所にしていこう」という意味で「ドメスティケーション」の概念に言及しながら、「与えられた空間を自分の『家』にしていく行為」、「ある集団がある地域を自分たちの『まち』にしていく」行為、「国家が国民を形成すること」など、複数の水準でドメスティケーションが生じていることを指摘し、それぞれが交渉し闘争する過程として住まいの形成をとらえることを提唱している(西川・祐成・篠原他2004:5-6)。

「空間を飼い慣らして、自分の生きる場所にしていこう」ことは、ひとりだちを果たすために自分と周囲の環境との関係を調整していく行為の一部であり、そこに生じる交渉や闘争は「発達文化の覇権をめぐる抗争」(関1998:286)でもある。「育ちの場」をめぐる発達文化を解説するということは、こうした交渉の過程を読み解くことにほかならない。そのために求められる作業は、空間を構成する要素の一つ一つに付与された人間形成上の意味を解釈し、それは誰によって意味づけられたものなのか、その意味づけに揺さぶりがかけられているとしたらそれは何に起因するのか、その空間で暮らす人はそれにどう対応してきたのかといったことを問うことによって、人づくりをめぐる人々の思いや葛藤の一端を読み解いていくことであろう。

註

- 1) ここでは、「文化化」を「定型的、非定型および準定型的な文化伝達のモードをとおして、個人が、言語、技術、社会経済的、観念的、認知的、感情的な文化のパターンを習得する、生涯継続する過程」(Wilbert 1976、江淵1994:37-38)とするウィルバートの定義を採用している。彼女は「文化化」と「教育」の用語を同義語として用い、その形式を「定型(フォーマル)」「準定型的(ノンフォーマル)」「非定型的(インフォーマル)」の三つに区分することを提唱している。
- 2) 例えば、ユルゲン・シュリーヴァーは、国家が大衆を国民として形成していくためにおこなう「国民教育」、すなわち「政治・道徳的な行動様式の伝達」が、

公共空間の演出によって実践されてきたことに注目している。ここでいう公共空間の演出とは、国民的祝祭や競技会、国旗、国歌、国民の祝日、時間・時刻・暦の変更、国民的英雄、記念碑、銅像、壁画、都市空間の設計、メディア、展覧会、磁器などの日用品のデザイン等々を指している。新しい社会の実現に向けて国民意識の形成を喫緊の課題とする場面では、新たな社会秩序を感性に訴えてイメージさせるために、空間を覆い尽くすほどの演出によって「見る者を圧倒させ、同時にその衝撃のもとに感覚を麻痺させてなじませるような意図的な働きかけ」がおこなわれる。これはフランス革命の頃から顕著であり、彼が比較検討の事例として用いたロシア革命、明治初期の日本、革命期メキシコでも共通して観察されるという(シュリーヴァー 2012、訳者の木下による解題も参照)。

- 3) アドリアン・フォーティによれば、イギリスでは19世紀の早い時期から「よい家庭はその住み手に有益な精神的影響を及ぼすはずだ」という信念が広がりつつあり、住まいを美しくすることへの関心が高まり始めていたという。当時は、貴族階級の家庭に見られた仰々しく機能性に欠けるヴィクトリア様式の装飾が「美の第一の標準」であったが、中流階級の人々にそれに代わる簡素な様式を提供したのが、「アーツ・アンド・クラフツ運動につながるデザイン改革者たち」であった(フォーティ1986=1992:137-140)。
- 4) 内藤史郎は、ラスキンとモリスの両者はともに人間疎外の問題を芸術教育によって克服することを目指していたと指摘している(内藤1973a, 1973b)。モリスの思想形成過程については、藤田(1996)などを参照。
- 5) アーツ・アンド・クラフツ運動は、モリス・マーシャル・フォークナー商会の創設時に実質的に始まったとされるが、まもなく同様の近代工芸ギルドがいくつも結成された。なかでも、この運動において中心的な役割を担ったのは、1884年に画家、彫刻家、デザイナー、建築家ら25名が集まって創設した「アート・ワーカーズ・ギルド」である。このギルドは制作をおこなう工房ではなく、会員の社会的交流の場であったが、やがて諸芸術の合同展示会が構想されるようになり、このギルドの中から1887年に「アーツ・アンド・クラフツ展覧会協会」が生まれた。この協会によって「アーツ・アンド・クラフツ」という言葉と理念が定着したとされている(藤田2009:46)。
- 6) モリスは自然環境保護の先駆者としても知られている。1877年に古建築物保護協会を設立し、歴史的建造物を修復せず、オリジナルのまま保存することを訴えた。古建築物保護協会は、1866年創設の共有地保存協会(1895年に創設されたナショナル・トラス

- トの前身)と協力し、以後のイギリスの環境保護運動を牽引する存在となっていく。ナショナル・トラストの創設に関与していたラスキンも、修復を建造物の破壊とみなして厳しく批判していた。
- 7) ただし、バーネットの予想に反してハムステッドの立地条件は労働者にとって魅力的なものではなく、実際にハムステッドに入居したのはより裕福な人々だった。そのため、計画全体の設計も再検討を余儀なくされ、結果的には住宅の外観や街並みは中産階級向けのものへと変更された。
 - 8) ハワードが思い描いた田園都市は、周囲を農地で囲んで食糧の自給自足を可能とし、都市内には人口に見合う産業を配して、人々の生活と仕事すべて市内で完結するように設計されている。また、社会的連帯にもとづく地域社会の創出を目指すものでもあり、都市の管理は住民による運営委員会がおこなうものとされた。
 - 9) モリスはラスキンの『ゴシックの本質』ケルムスコット・プレス版に寄せた序文の中で、ラスキンに先駆けて人が労働から喜びを得ることの重要性を述べた人物としてオーエンとシャルル・フーリエ (1772-1837) を挙げている (モリス1892=2011:9-10)。
 - 10) ただし、山名はこれを「田園都市運動の宣伝活動において強調されたそのような漠然とした空間の人間形成力」(山名2006:13)とみなしたうえで、「もう一步踏み込んで田園都市における教育の具体層を検討」することを重視し、ドイツのドレスデン近郊に建設された田園都市ヘレラウにおける教育施設やそこでの教育活動を考察の中心に据えている。
 - 11) ヘレラウの建設は1909年に着工された。1910年にはドイツ工芸工場の新しい工場が完成し、住宅やその他の営造物も次々と建築され、ドイツを代表する田園都市の一つと目されるようになったが、やがて内部にさまざまな困難を抱え込むこととなり、1930年代に田園都市としては崩壊したとされる。
 - 12) 柏木博は、1920-30年代のアメリカに登場し大衆消費社会をつくりだしたフォーティズムも、大量生産システムを導入することで労働のあり方を変え、それによって目指すべき社会の実現を目指すものであったという点では類似の性格をもってたと述べている。「大量に生産されたものは、大量に印刷された文章が人々の思考や感覚を変化させたように、確実に、わたしたちの思考や感覚を変化させていった」(柏木1992:79)という指摘は重要である。
 - 13) 当時の住宅政策立案過程におけるモダニズムの影響については、Eriksson (2001)、Rudberg (1999) を参照。また、ケメニー (1992=2014) は、政治的支配の確立過程におけるハウジング (居住) の重要性を論じるための事例として、スウェーデンの福祉国家形成過程における住宅政策を取り上げている。
 - 14) 日本のセツルメント運動において芸術教育はさほど重視されなかったが、1920年代に始まる柳宗悦の民藝運動は、国際的なアーツ・アンド・クラフツ運動の展開に大きな影響力を發揮した。また、山本鼎が1919年に開始した農民美術運動も、芸術と生活を結びつけることを目指していた。
 - 15) 生活改善同盟会が結成された際、その機関紙『生活改善』第一号の巻頭には、「第一に努めなければならぬことは、国民の覚醒を促がし思想を善導して、其の生活振りを一層緊張せしむることでありませう。即ち衣食住・社交等の上に於ける一切の無駄を省き、虚飾を去って其の生活様式を改め、一層合理的のものたらしむることでありませう。そして之に依って国民に生活の安定を得させ、其の活動能率を増進して我が国運の進展に寄与することは実に刻下の一大急務と存じます」(祐成2008:77、生活改善同盟会1921/1987:270) という宣言が掲載された。
 - 16) この点と合わせて、今が1930年の欧米視察旅行の際にスウェーデンにも立ち寄り、伝統的な農村の景観を保存・再現した世界初の野外民俗博物館「スカンセン」や、庶民の日用品を収集・展示する「北欧博物館」を訪れていたこと、また、今と同じく生活改善同盟会の委員であり、東京教育博物館長を務めたこともある棚橋源太郎 (1869-1961) が、生活改善事業および社会教育に関する研究を目的の一つとした1925年のヨーロッパ留学から帰国したのち郷土教育施設としての郷土博物館論を展開し、そのなかでスカンセンにも強い関心を寄せていたことなども興味深い。棚橋のいう「郷土」とは、「少年時代に居住し、成長した土地を中心にして、屢々来往した都府県までぐるみの地域内に於ける自然的環境との接触並に社会的生活に於て、受けた幾多の刺激体験から成り立つたもので、深く脳裡に固着して、終生忘れることができない」(福田2011:23、棚橋1932:14)ものを指している。棚橋は、こうした意味での「郷土」を核とする博物館を国民教育機関として各地域に設置することを構想していた。
 - 17) フォーティによれば、中流階級の子どもの向けの家具や食器類は19世紀末から量産されるようになったが、その背景にあったのは、子どもの健康や身体の発達への配慮というよりは、子どもに適した「快適で便利な場所」で生活することが子どもの心理によい影響を与えるという観念が広まったことであるという。彼が引用している子ども用家具メーカーの1914年のカタログには、「子供はじつは、環境にきわめて左右されやすいので、彼らの身のまわりに美しく役に立つものを置くことがとても大切なのです。子供が明るく楽しいものにとりまかれていれば、やがて彼は、幸せな、気立てのいい子に育つことでしょ」という一文がある (フォーティ 1986=1992:91-92)。

参考文献

- 青木利夫・柿内真紀・関啓子編 (2015) 『生活世界に織り込まれた発達文化—人間形成の全体史への道』東信堂。
- 江淵一公 (1994) 『異文化間教育学序説—移民・在留民の比較教育民族誌的分析』九州大学出版会。
- 大島葉月 (2010) 「近代イギリス田園都市運動の展開—ロンドンの田園都市と田園郊外」、広島芸術学会編『藝術研究』第23号。
- 柏木博 (1992) 『デザインの20世紀』日本放送出版協会。
- 黒石いずみ (2009) 「セツルメントと生活芸術」、藤田治彦編『芸術と福祉—アーティストとしての人間』大阪大学出版会。
- ケメニー、ジム (1992-2014) 『ハウジングと福祉国家—居住空間の社会的構築』新曜社。
- 今和次郎 (1922/1989) 『日本の民家』岩波文庫。
- シュリーヴァー、ユルゲン (2012) 「儀式による教育—革命(後)社会における公共空間での演出と感性論的な意識形成」木下江美訳、『〈教育と社会〉研究』第22号。
- 神野由紀 (2011) 『子どもをめぐるデザインと近代—拡大する商品世界』世界思想社。
- 祐成保志 (2008) 『〈住宅〉の歴史社会学—日常生活をめぐる啓蒙・動員・産業化』新曜社。
- 生活改善同盟会 (1921) 「生活改善同盟会の本領」、南博・江原恵・柏木博・藤森照信・布野修司・大竹誠・内田青蔵・松山巖編 (1987) 『近代庶民生活史6 食・住』三一書房。
- 関啓子 (1998) 「比較発達社会史の冒険—ひとりだちをめぐるタタール人の葛藤の歴史」、中内敏夫・関啓子・太田素子編『人間形成の全体史—比較発達社会史への道』大月書店。
- 棚橋源太郎 (1932) 『郷土博物館』刀江書院。
- デューイ、ジョン (1916=1975) 『民主主義と教育(上)』松野安男訳、岩波文庫。
- トゥアン、イーファー (1982=1993) 『個人空間の誕生—食卓・家屋・劇場・世界』せりか書房。
- 内藤史郎 (1973a) 「解説」、梅根悟編『世界教育学名著選18 ラスキン 芸術教育論』明治図書。
- 内藤史郎 (1973b) 「解説」、梅根悟編『世界教育学名著選18 モリス 民衆のための芸術教育』明治図書。
- 内務省地方局有志 (1907) 「田園都市」、香山健一編 (1980) 『田園都市と日本人』講談社学術文庫。
- 西川祐子・祐成保志・篠原聡子・黒石いずみ・山崎泰寛・鉄矢悦朗・巖爽・藤原徹平 (2014) 「住まい教育と社会」、『建築雑誌』No.1657 (2014年4月号)。
- 西山八重子 (2002) 『イギリス田園都市の社会学』ミネルヴァ書房。
- ネイラー、ジリアン (1990=1997) 「スウェディッシュ・グレイス—それはモダニズム受容の姿なのか」梅宮弘光訳、グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』中山修一・吉田健一・梅宮弘光・速水豊訳、鹿島出版会。
- ハワード、エベネザー (1902=1968) 『明日の田園都市』長素連訳、鹿島研究所出版会。
- フォーティ、アドリアン (1986=1992) 『欲望のオブジェ—デザインと社会 1750-1980』高島平吾訳、鹿島出版会。
- 福田珠己 (2011) 「棚橋源太郎の博物館論と郷土の具体化」、『空間・社会・地理思想』14号。
- 藤田治彦 (1996) 『ウィリアム・モリス—近代デザインの原点』鹿島出版会。
- 藤田治彦 (2008) 「ラファエル前派からアーツ・アンド・クラフツ運動へ」、デザイン史フォーラム編『近代工芸運動とデザイン史』思文閣出版。
- 藤田治彦 (2009) 「ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動」、藤田治彦編『芸術と福祉—アーティストとしての人間』大阪大学出版会。
- ボルノウ、オットー・フリードリッヒ (1963=1988) 『人間と空間』せりか書房。
- モリス、ウィリアム (1879=1973) 「民衆の芸術」内藤史郎訳、梅根悟編『世界教育学名著選18 モリス 民衆のための芸術教育』明治図書。
- モリス、ウィリアム (1892=2011) 「ウィリアム・モリスによる序文」、ラスキン『ゴシックの本質』川端康雄訳、みすず書房。
- 山名淳 (2006) 『夢幻のドイツ田園都市—教育共同体ヘレラウの挑戦』ミネルヴァ書房。
- 横山千晶 (2009) 「『ホワイトチャペルの息子たち』—ロンドンのイースト・エンドと現代芸術」、藤田治彦編『芸術と福祉—アーティストとしての人間』大阪大学出版会。
- Eriksson, E. (2001) *Den moderna staden tar form. Arkitektur och debatt 1919-1935*, Stockholm: Ordfront.
- Hartman, K. (1976) *Deutsche Gartenstadtbewegung. Kulturpolitik und Gesellschaftsreform*, München.
- Key, E. (1899) *Shönhet för alla*, Stockholm: Bonnier.
- Key, E. (1900) Folket och konsten, i *Varia* (Stockholm: Svanbäck, 1898-1908) 1900 (3:1)
- Key, E. (1906) *Folkbildningsarbetet: särskildt med hänsyn till skönhetssinnets odling: en återblick och några framtidsönsningar*, Uppsala: Appelberg i distr.
- Lengborn, T. (2002) *Ellen Key och skönheten: estetiska och konstpedagogiska utvecklingslinjer i Ellen Keys författarskap 1891-1906*, Hedemora: Gidlund.
- Morris, W. (1880/2012) "The Beauty of Life," in *The Collected Works of William Morris: Volume 22*, Cambridge University Press.
- Paulsson, G. (1919) *Vackrare vardagsvara*, Stockholm: Svenska slöjdföreningen.

- Paulsson, G., Markelius, S., Åhrén, U., Asplund, G.,
Sundahl E. & Gahn, W. (1931) *Acceptera*, Stockholm:
Tiden.
- Rudberg, E. (1999) *Stockholmsutställningen 1930.
Modernismens genombrott i svensk arkitektur*,
Stockholm: Stockholmania.
- Wilbert, J. ed. (1976) *Enculturation in Latin America:
An Anthropology*, University of California.